

風土の心理臨床学的研究

—生きる場としての風土—

井上明美

I. はじめに

現代に生きるわれわれ人間は誰もが、自らが学ぼうと意図しなくとも、日常の生活の中で受動的に多くの知識を得ることができる。その大半は実際の経験とは遠く離れた、自明の事実として一方的に与えられる知識である。大量の知識を身につけることを可能としたのは、近代科学が普遍性・論理性・客観性という三つの原理を獲得し、誰が扱おうと例外なく首尾一貫した結果を導き出す現実を保持することによって飛躍的に発達してきたことによる。中村（1992）は、近代科学が捉えてきた現実に対して「具体的現実捉えられてきていない」と見なし、近代科学によって捉えられた現実とは、基本的には機械論的、力学的に選び取られ、整えられたものにすぎないとする。事象の自然的で必然的な因果連関を、実際には存在する環境との複雑な相互関係の網のなかから取り出して扱えたことが近代科学が大きな成果を得たゆえんであり、普遍性・論理性・客観性という原理が軽視し、排除してきたものについて考えていく必要性を指摘している。

確かに、近代科学の発展と有効性はあらゆる学問領域に影響を与えてきたことは事実である。人間を研究対象とする心理学も例外ではなく、近代科学の生み出した実験法や統計的手法を用いて発展を遂げてきた。心理学の中の一領域である臨床心理学も、理論や方法論を導き出すうえで近代科学によって得た成果の恩恵を受けてきたことは否定できない。しかしながら、生きている人間と個別的に直接関わる臨床心理学においては、主体となる人間が客観的に現象を観察することや実験を行うことで因果関係を見出す近代科学の手法をそのまま用いることはできない。皆藤（1998）は、「症状や問題行動の原因を探求し、その原因を取り除くことによってそれらが消失する」という自然科学的因果関係モデルを安易に心理療法の場に持ち込むことで、唯一無二の個人であるクライアントに相対しているという体験的事実を軽視することになり、そのことで、クライアントに計り知れない傷を負わす危険性を指摘し、心理療法の理論や方法は客観的・普遍的なものではありえないとする。普遍的・客観的・因果関係モデルに沿って心理療法を行おうとするならば、目の前にいるクライアントをそのまま受け入れることよりも、クライアント個人をそのモデルに適合するように動かしていく操作的手法に陥る可能性があり、操作すること自体が目的になることや主体的に生きられずに傷ついてきたクライアントを更に傷つける危険性があると思われる。つまり、近代科学の研究手法に従うならば、治療者であるはずの者がクライアントに対して、面接室というクライアントが守られるべき場において観察や実験を行うことになる。

河合（1995）は、「生命をもった人間ということが研究対象として考えられる限り、それはく

もの>を対象として発展した近代科学とは異なる研究方法を必要とする」と指摘する。筆者は、異なる方法とは、治療者としてクライアントにかかわる者が、目の前にいる個人をありのままに受け入れて主観によるかかわりを持ち、そのかかわりを終えた後に、クライアントとともに主観的にかかわる治療者自身への客観的分析と両者の関係の中で生じてきたことを検討していく方法であるとする。臨床心理学では、必然的に実践と研究が分け難いものとして存在し、効率的に結果を求めるよりも、一つずつの実践事例を通じて丁寧に研究に取り組むという方法を採用ことになる。事例は、生身の人間が悩み傷つきながら生きていく姿そのものであり、人間は生きる場から切り離して存在しえないのであるから、そこには、近代科学の普遍性・論理性・客観性という原理が軽視し、排除してきた、クライアントが個人的日常を生きる場としての風土が存在する。唯一無二の掛け替えのない存在である個人の事例であるからこそ、それぞれの実践事例は何物にも代えられない貴重な事例となる。その事例を丁寧に扱っていくことが、生命ある人間を研究することであるとする。

ところで、生きる場としての風土とは、単に個人が生きている場所を指しているだけではない。地形や気候などの自然や歴史とそこに生きる人間との相互関係の中から培われてきた文化や習慣、ものの考え方や人間関係など、そこに生きる人間の外的世界だけでなく内的世界形成にもかかわるものとする。生きる場としての風土と遊離した人間は存在しないのであるから、風土を研究することは、それぞれの風土に存在する人間のより深い理解のためには重要であると思われる。

そこで本稿では、人間存在と深くかかわりながらも近代科学が軽視してきた生きる場としての風土を、目の前に存在する人間そのものと深くかかわってきた臨床心理学的視点を通じて論じていきたい。まずは、これまでの風土研究全般の歴史的展開と動向を論考した上で、筆者がかかわってきた心理臨床事例を見直すことで、事例のクライアントが生きる姿や内的世界を通じて、内的世界形成に関わる生きる場としての風土について考えていきたい。その上で、今後の研究の方向性を明らかにしていきたい。

II. 風土研究の歴史的展開と動向・・・比較風土論

1. 西欧における風土論

古代ギリシャ人である Herodotus (BC. 5c) は、ナイル川上流地域の雨期がもたらす大河の氾濫によって高度な文明を発達させたエジプトを「ナイルの賜物である」と称し、また、同じく古代ギリシャ人 Aristotle (BC. 4c) が「寒い地方の民族は勇気に満ちているが、思慮と技術に欠けている。暖かいアジアの民族は知的であり技術を持っているが、勇気に欠けている。ギリシャの民族はその居住地が中間の気候帯に位置しているので、勇気があり思慮深い」と述べたように、古代より気候や地形などの風土が人間の生き方や文化に与える影響に関心が向けられてきた。また、Aristotle は『政治学』の中で、「植物は動物のために造られ、動物は人間のために造られている。家畜は使用や食糧のために、野獣はその大部分が食糧、その他補給のために存在する」と自然は究極的には人間のために存在すると述べている。つまり、Aristotle は、気候の良し悪しが人種や民族の優劣を生じ、自然を支配する人間の中でも最も優秀な民族がギリシャ人であると

考えた。Passmore,J (1974) は、『自然に対する人間の責任』の中で、「西欧には、自然は人間のためにのみ存在するのであるから人間は思いのままにこれを利用することができる、という強力な伝統が確かにある」と指摘し、Passmore は強力な伝統とは、Aristotle 以来の古代ギリシャ的自然観であると考えている。一方、White,L (1968) は人間による自然支配の根拠を『旧約聖書・創世記』に求める。「これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地のすべての這うものとのを治めさせよう」（創世記、第一章二十六節）と、創世記は「主なる神は人間を創造して、地と地に住むすべてのものを従わせる権利を認め、自然は人間のために造られたのである」と述べている。自然に君臨する人間中心の思想は古代より西欧世界に存在し、近代以前から、風土は単に人間を取り巻く地形や気候などの物理的環境として対象化されてきた。

このような中で、独自の風土論を展開したのは、18 世紀の言語学者の Herder,J,G である。Herder(1791) は『歴史哲学』において、地球上のそれぞれの土地に固有な気候や、地形、水、食物などがその土地に最もふさわしい生活習慣や言語を生じさせる、その多様性に生きることが人間の必然であると述べた。しかし、自然は神聖で尊いものには非ずと考え、人間に都合よく自然を改造していくことは神の意思に従うことであると、何の罪悪感も生じることはないキリスト教徒にとって、Herder の風土論は主流にはなりえなかった。西欧世界では、古代ギリシャと旧約聖書の自然観に基づく因果関係論と人間中心論が主流であり続け、近代科学の発展がそれを強固にしていっただのである。

風土と人間との因果関係としての風土論は、アメリカの探検家にして地理学者である Huntington,E (1915) の著書『気候と文明』に受け継がれる。Huntington は温度や湿度が人間の精神や肉体に影響を与える気候の力と文明の分布の間に密接な関係を認め、四季が明らかで刺激の多い気候ほど文明が発達するとした。Huntington が文明としたものは西洋文明であり、彼の歴史観・世界観はあくまでも西洋中心主義・白人至上主義の域を出ない。また、ドイツの地理学者 Ratzel,F (1882) は、膨大な著作『人類地理学』において人間の本質は地理的な影響のもとにあるとした。Huntington と同時期に、気候や風景が人間の内界に与える影響を明らかにしようとしたドイツの心理学者 Hellpack,W (1914) は、風土心理学という新たな概念を用い、「我々を取り巻く大気の性質及び生息する大地の性質は内界に直接影響を及ぼす。最も軽微な気分の動揺から最も重要な心理的病に至るまで我々の内界に影響を及ぼす。天候・気候および風景より来る心理的な作用が風土心理学の概念の内容をなす」とし、実際に雷雨や風、気温、湿度、雪などの天候が人々の内界に与える影響を記述すると同時に寒帯や熱帯などの気候帯に生じやすい性格や精神疾患について記述している。

一方、自然は人間のために存在するという人間中心風土論は、フランス地理学を代表する Blache,P (1922) に受け継がれる。その著書『人文地理学原理』の中で、これまで地理的条件により規定されてきた生活様式や人口の分布から、人間が自然に働きかけることを重視することで人間のための風土を人工的に造り出していく理論を展開した。Blache の理論は近代科学の発展とともに、自然をひたすら人間に都合よく改造する方向に進めていく。

このように西欧世界の風土論は主体と客体、人間と自然というように二元論的風土論であり、一方の風土論は客観的因果関係に基づき、気候や地形などの風土によって人間の優劣や社会の発達段階や文化を説明し、科学的に風土と人間を関係づけようとした。もう一方の風土論は、人間

の傲慢と自然破壊を加速度的に進行させる危険性をはらんだものであった。いずれにしても、これらの風土論は、風土と人間との関係を明らかにする上で、人間の視線がもたらす主観を排して客観的手法を重視した点は共通する。西欧においては、対象化可能な自然環境のみを風土とみなし、「人間の感性和理性に合致する法則性を発見し、その法則性に則って自然を人間の感性和理性の働きに奉仕せしめる」(古川、1997)意図で風土は論じられてきた。

2. 日本における風土論

日本における風土論は、その始まりから欧米とは大きく異なる。

地理学者である千葉(1983)によると、風土という言葉は中国から伝来した。同時に、水土も伝わったが、風土だけが日本に残った。水土は土や地下のことで、風土は地上の世界をさし、そこに人間の世界が入るという。大字源(1992)によれば、そもそも風の文字にはカゼ以外に、教え導くこと、その結果としての習わしや生活の在り方、それで養われる住民の気質などが意味として存在する。さらに、自然に発生する男女の愛情や気づかぬうちにかかる病気も風と呼ばれる。風の字はとり(後に、虫に変わった)と凡(大きい意)とから成る。大きい鳥、すなわち鳳凰を意味し、借りてかぜの意に用いた。一方、土は地中から直物が噴き出されるように発芽する様を形どり、一説には、土地の神を祭るために設けた土盛りの形をかたどり、つちの神を表すという。意味はツチ以外に、耕作地、ふるさと、地方、居住地、国土、大地の神、そこから産土神などの意味も存在する。また、土は天地の間に広がり、巡り動いてやむことのない五行の一つとして、宇宙の万物を生成する。土風といえ、土地ごとの風俗習慣を指す。つまり、中国では風土は単に自然的な気候や地質や地形ではなく、宇宙の生成に関わり、大地から命を生み出す神や生まれ出る命の様とそこに生きる人々の生きるあり方を意味すると考えられた。

日本においても、風土を対象化して人間を取り巻く単なる環境にすぎないと捉えてはいない。むしろ、風土は命を生み出し、その命が生きる場として、人間は風土の懷に抱かれてはじめて生存できるとみなされてきたと考えられる。また、日本では奈良時代に地誌である風土記が著されて以来、風土をある特定の地域の自然、地形、気候や産業、歴史など、地域に内在する特性とも捉えてきた。近代以降は、和辻(1935)が『風土—人間学的考察』を著すと、日本の風土論は人間の内界との関係の中で論じられていく。それは、欧米が風土を気候や地形などの物理的環境として、主体と客体、人間と自然という二元論的風土論として客観的因果関係を追い求めてきた流れとは異なる。

和辻は、「風土とは、単なる気候や地形などの自然現象ではなく、人間の生き方の表現であり、その地域固有の生活や様式やものの考え方に表出されるものである」と捉え、ある地域の地表上で生起するあらゆる諸現象をさし、そのなかで人間が己を見いだす仕方、自己了解ととらえた。言い換えれば、風土とは、外的な環境を内的な世界の中で再構成し、そこから生み出されたイメージであると考えられる。また、民俗学者である篠原(1995)は、「風土とは、人々がその環境を主体化し創造への喚起力となる心的なイメージであり、その環境には、自然環境、社会文化的環境、歴史的環境が含まれる。風土は人と自然、人と歴史の相互の働きあいの中で、解釈という認識過程を通じて形成されてきたもので、解釈された歴史が作るある地域の自己表現」としている。地理学者である千葉(1980)は、風土を「継続して習慣や生活態度、そしてものの考え方な

どの文化の基本的部分を左右するほどの力を発揮している場合、外からする自然の作用や肉体に及ぼして内部から生活様式を規定する力を含めて風土という概念を設定する。地理的、または歴史的な環境よりも広範な概念である」と定義する。文化・社会・自然科学にまたがる九つの学会から成る九学会連合では、昭和 28 年以来 40 年近く、いくつかの特定の地域の自然・文化・社会に関する総合的な調査・研究を実施してきた。その九学会連合（1985）は、風土は「人間の主観が捉えた人間との関わりでみる自然であり、自然と人間との共同作業で出来上がった、ある一定地域のまとまりである。風土を考える場合、その地域で生活する人々を主体にすることが必要」とし、「日本の伝統的風土は自然を風土として自分がその中に入り、一体感を味わう。自然を対象としてではなく、まさに母の懷に抱かれているもののように感じるもの」と定義する。

このように日本の風土論は、自然を客体化することで法則性を追求する西洋の風土論とは根源的に違いがある。

Ⅲ. 心理臨床における風土研究に関する問題提起

近代科学は日本的な風土性を神秘主義と批判する(Passmore,J,1974)。日本的な風土性の前提には、自然を神聖なものとし、自然に存在するあらゆる物、例えば老木や山にも神や魂が宿るとみなす自然観がある。森羅万象が繋がりあった生命体としての自然、その自然の一員として人間が存在すると考える。したがって、自然は支配されるものではなく、人間とともにあり、その自然と人間との相互作用の中から風土は生成され则认为られる。西欧が「人間は科学の分析的な知、機械論的な知を手に入れることによって、事物と自然をひたすら対象化し、事物や自然の普遍的な法則を知ってそれらを支配しようとしてきた」(中村、1992)あり方とは、根本的に異なる。Jung,C,G (1930) は『古代的人間』の中で、「古代の世界では、万物が人類の魂を、集合的無意識を持ち、個人はまだ魂を持つに至っていない。投影によってつくり出された同一性は、一つの世界を創り上げる。人間は肉体的のみならず精神的にも世界の中に完全に組み込まれ、古代的人間は決して自然を支配しようとはしない」と述べているが、日本の風土性は古代的風土性と呼ぶことが可能であろう。Berque,A (1986) は「日本という国は、西欧的な近代化が唯一のものではないということを決定的に証明した」と指摘しているが、近代化をなし得ながら、古代的風土性を保持し続ける日本の風土性は西欧からすれば非常に特異な風土性であると考えられる。そこで、日本の風土性を検討することは、近代科学的視点では捉えることができなかった人間の在り様が明らかになる可能性がある。

これまでの日本の風土研究は、自然環境としての風土と人間の関係を対象とする、気象学、地理学、医学、土木工学などの自然科学系分野だけでなく、自然や人間の生み出した社会的環境としての風土と人間やその生活の営みとの関係を対象とする文化人類学、民俗学、教育学、政治学、社会学、言語学など人文社会系分野など様々な分野で研究されてきた。これまでの研究では、自然や社会との関係の中から人間が生み出してきた文化や生活様式、習俗、産業、疾病、建築物、言語などの表面に表われ出る事象を通じて風土性が論じられてきた。表出される事象は、生きる場において人間が内的な作業を経て表現したものである。和辻の言う人間の生き方の表現であり、

その地域固有の生活や様式やものの考え方として表出されるものである。つまり、これまでの風土研究は人間の内面から外部に表出されたものを通じて、ある地域やもっと広くはある国の風土性を論じてきたが、風土の生成に関わる人間の内面についてはほとんど触れられてきていないように思われる。しかし、人間が自然や地域の人々との関係の中でどのような内的な動きを通じて風土を生成していくのか、表現を行う人間の内界にこそ、最も求めるべき風土性は存在すると思われる。

ところで、心理学一般では、気候や地形等の自然環境や所属する社会や集団が人間の内面に与える影響を、統計的手法を用いてあるいは実験的に明らかにする試みがなされてきた。心理学の中でも臨床心理学では、近年、心理臨床家がスクールカウンセラーとしてクライアントが日常を過ごす場実際に赴くことによって、風土を強く意識するようになってきている。学校を一つのコミュニティとする鶴飼・鶴飼(1997)・村山(1999)をはじめ、派遣先の学校や学級が持つ特徴を個別的な性格ととらえ、その性格を風土と位置付ける伊藤・松井(1998)・西田・田嶋(2000)・伊藤(2001, 2007)など、学校や学級を一つの風土と捉えた研究が見られる。これらの風土研究は、人々が日常を生きる地域から離れて目的に従って集合し、活動する場の構成員が醸し出す雰囲気や社会的環境を研究対象とする。それは、これまで社会心理学や教育心理学で政治風土、企業風土、職場風土、教育風土等として扱ってきた精神風土研究に含まれるものである。精神風土は、人間が日常を生きる場としての風土から目的に従って切り取られた風土である。生きる場としての風土から切り取られた風土研究は、本稿で目指す風土研究とは異なる。一方、橋本(2001, 2005)、青木・橋本ら(2006)は沖縄に赴き、女性祭司である神人のイニシエーション過程を検討すると同時に心理臨床家である自身の沖縄でのイニシエーション体験を風土臨床とした。ここでも、日常を生きる人々の生きる場ではなく、ある特別な役割を担う人の特別な場としての風土研究である点で本稿の求めるところと異なる。

日常を生きる場としての風土研究に関しては、井上(2006)が、スクールカウンセラーの視野を地域環境にまで広げることで、地域の風土が個人の生き方のみならず学校で期待される心理的援助にまで影響を与えることを明らかにし、地域風土のアセスメントとそれを踏まえた援助を行う必要性を示した。さらに、井上(2009)は、地域アセスメントを行う中で、世代を超えて繰り返される母と子の結びつきの強さから地域独自の内的世界の存在に気づき、核となるものを求めたところ地域独自の神事に行き着いた。毎年、何百年と変わることなく繰り返されてきた神事によって、地域独自の内的世界もまた変わることなく存続し続けていることを指摘した。それをなし得てきたのは、神事がそれを行う過程において、地域独自のコスモロジーを伝えるとともにイニシエーション儀礼としての機能を果たしてきからであると思われる。コスモロジーとは、世界あるいは宇宙をどのようにとらえるかというある解釈の体系である(村武, 1994)。Eliade, M(1958)によれば、伝統的社会では、イニシエーション儀礼を通じて、その社会における人々と超自然者との間に、天地開闢の時の始めに当たって樹立された神秘的な関係からコスモロジーと人間像を授けられる。そうして初めて、その人間が生きる人間社会へ、そして精神的・文化的価値の社会への加入が可能となる。その神事を毎年繰り返すことは、宇宙創造を象徴的に繰り返し、この世の初めにおこったことを再実現化することであり、聖なる力を復活させるとともにその社会に存続してきた秩序の生成と再生産とに結び付く。そのことによって、地域の人々の独自の内

的世界は変わることなくあり続けこととなり、そこから独自の風土性は保持され続けることになると考えられる。つまり、地域の独自の風土性は、人々の内的世界の独自のコスモロジーとそれに従う秩序によって形成され、そのコスモロジーと秩序が、毎年繰り返される神事によって再生産され続けることで、独自の風土性は存在し続けると思われる。このように、人間の内界と風土とは切り離して存在しえないものであると考えられる。

ここより、地域の独自の風土性を明らかにする試みは、地域集団に属する人々の内的世界に存続する独自のコスモロジーとそれに従う秩序を明らかにすることにつながると思われる。そこで、独自の風土性を持つと考えられる地域に生きる女性の具体的事例を通じて、これまで述べてきた生きる場としての風土と人間の内的世界との関係をより具体的に考えていきたい。

IV. 事例にみる生きる場としての風土

1. 【事例】内において強固に結びつく地域社会に生きる不登校長男を抱えた女性 《事例地域の様子》

山間にある地域は、農業と林業が中心である。働く場が限られているために地域への新たな転入者はほとんどみられないが、地域では古くからの秩序を維持するためにそれを歓迎しているとも思われる。地元に残る大半は家を継ぐべき長男とその妻である。また、江戸時代から続く家が多く、その家族形態は三世同居家族である。婚姻も地域の者同士で行われることが多く、その結果として、地域内の居住者のほとんどは血族や姻族として姻戚関係にある。地域には古くからの神事をはじめとして、さまざまな行事や風習が残り、それらを通じて地域内の人々は強固に結びつく。地域の入り口には、そこを通る外部からの訪問者にとっては、畏れと威圧感を感じさせる鎮守の森が広がる。外部からの侵入者を制限することで、旧来の秩序を維持してきた地域であると思われる。

《事例内容》

中学1年生長男の不登校を主訴とし、中学校スクールカウンセラーとして勤務する筆者のもとへ来談したA子は、年齢よりも老け、やつれて見える。A子は、筆者と話しだす前から目には涙がたまっている。家の恥と考える内容を他人に話すことに最初はためらったA子であるが、一度話しだすと堰を切ったように言葉があふれ出る。

小学校3年生から行き渋りが始まった長男は、しばらくは同居する姑が強制的に別室登校をさせていたが、その後は全く登校しなくなった。そのことで、A子は舅姑や夫から厳しく責められる毎日が続いている。

A子の家族は、夫婦と子ども二人に夫の両親が同居する6人家族である。病気がちの舅は、地元では名家の出身として一目置かれてはいたが、広大な山や田畑を有する一家の中では農作業に従事できず、姑は結婚直後から、家事一切から農作業まで舅の両親から厳しく仕込まれた。A子は同じ地域内から嫁いできた。嫁いでみると、一家の実権はこれまで全てを采配してきた姑にあり、息子である夫や舅も姑の言うままに

あった。A子も姑には逆らうことは許されず、『一家に主婦は二人もいない』という姑の言葉に従い、第一子である長女出産後一年で地域の外にある工場に働きに出た。長男出産時は産後8週から仕事に復帰し、長男の子育ては姑が担うことになった。長男は幼いころから利発で、理解が早い。周囲が期待する通りの行動ができる。姑は嫁であるA子のようにならないためと称して、長男には厳しくしつけをした。長男は不登校になってからは、毎日のように祖父母から聞かされる母親の悪口に辟易し、祖父母に関わる物に触れると手洗いがやめられなくなった。

夫は長男の状態を女々しく甘えているとしか言わない。殴ってでも無理やり登校させようとしたことがあったが、長男の激しい抵抗にあってからは、夫は自分から長男に関わっていこうとはしない。悩む妻の相談にも耳を傾けないで、休みごとにどこかへ出かけていく。やがて、ギャンブルによる夫の莫大な借金が明らかになった。夫は借金を作っては、A子にわからぬように母親である姑にお金を工面してもらってきた。それにも拘らず夫は借金を続け、一家がいつ路頭に迷うかわからないようになって初めて、姑と夫はA子に借金の事実を伝えた。A子は借金の事実以上に夫と姑の間に存在した秘密と強い結びつきに傷つき、一時は離婚をして地域から離れることも考えたが、怒りとともに家の内外から長男を守る決意をした。

その後のA子は、表面的には夫や姑との穏やかな生活の続けながら、彼らのとの距離を置く一方で、長男との密接な関係を築いていく。長男はA子に支えられながら、A子と共に農作業に出かけるようになり、家の外での行動範囲を広げていった。A子と一緒に買物や外食もできるようになり、長男は回復していくように思われ、長男に影響を持つ母として家でのA子の発言力も大きくなった。ところが、筆者にはA子と長男との距離のなさが気になりだした。A子は長男と一体化しながら姑・夫に対抗していくように思われた。長男の中学校卒業後は一年間、自宅から遠方にある筆者が勤務する相談機関でのカウンセリングを継続したA子であるが、A子自身の一人の人としての在り方に取り組む時が来たと筆者が考えたとき、A子は長男の回復と遠方を理由に4年間にわたる面接を終わらせた。

2. 内的世界にある風土性と生きる場としての風土

面接を終えて数年を経た事例であるが、筆者は風土と心理臨床を考えると、この事例と向き合うことを避けることはできない。それは、面接終了時に風土に生きようと決意したA子の在り様を十分に受け止めることが出来なかった心理臨床家としての思いから生じている。そこで、この場において、面接の中でA子と筆者の間に何が生まれ、A子が面接を終わらせるに至った思いは如何なるものかを、今一度、A子の内的世界にある風土性との関係の中で読み解いていきたい。

事例の地域は、変化していく時代にありながら、地域の人たちの強いつながりと侵入者としての他者を排除することで、旧来の秩序と風土性を維持してきた。旧来の秩序とは、長男あるいはそれに代わる者が家を継ぐことで、先祖伝来の田畑や山などの財産、血脈としての家そのものと古くからの神事や因習を守り続けることである。また、他者排除によって地域の風土性を変容させることなく伝承してきたが、同時に、手段であった内部の強いつながりと他者排除そのものが

地域の風土性の一部をなしてきたと考えられる。

筆者は、風土は地域の景観の中や人々の生み出す文化や宗教、生き方そのものに表出されるものであると考える。また、風土性とは地域独自のコスモロジーやものの見方、価値観など、風土形成を導くものとして地域に内在するものであると考える。千葉（1966）は、「地域社会で育った風習や考え方がその内部に住む人々を無意識のうちに規制しており、彼らのものの考え方や行動を方向付ける」と述べているが、筆者は、ここに著される地域に住む人々を無意識に規制する風習や考え方が風土性であり、ものの考え方や行動として表われ出たものを風土と捉える。

このように考えるならば、事例で示した地域の風土性とは旧来の秩序の保持と地域内の強固なつながりと排他性である。言い換えれば、包み込むことで変化しないことと守りの強さである。この風土性が、事例地域の風土として、近代以前の日本のような懐かしい景観や家族形態、人々の生き方に表出されていると思われる。

事例女性A子は、生まれてから居住する地域及びその周辺しか知らずに成長し、結婚後も同じ地域内に暮らし続けている。A子の内部には地域の風土性がA子誕生以来培われてきたと思われる。姑や夫も同じ地域で生きてきた。彼らの内部にもA子と同様の風土性が生きていると思われる。そのA子の長男が、地域の価値観ではあってはならない不登校という問題を生じさせた。A子をはじめ姑や夫が、長男の不登校を単に学校に行けないでいる子どもの問題として捉える以上に、自分たちの内面を脅かす脅威と感じたことは容易に想像できる。従来の家族や学校の在り方の中で不登校であり続ける長男の存在は、地域の風土性である変化しないことと守りの強さを揺さぶる。揺さぶられ不安に駆られたA子や姑たちは、言葉に出さずともお互いに原因と責任をなすりつけ合うこととなった。しかし、発言力のない者は強者によって一方的に責めを負わされることになる。A子は、一方的に姑とその姑に従う夫から批判されるが、言い返すことができない。なんとしても長男が不登校から脱して、地域の他の子供たちのように登校することが家族にとって、そしてA子にとって何よりも重要な使命になり、追いつめられたA子は、地域の外部の力を借りることになる。それが、スクールカウンセラーであった。

A子との4年間の心理面接の中で、一貫してA子は姑とその姑と一体化した夫への不満を語り続けた。初期のころは、家族の中で最も弱い立場であるA子に対して姑が言い放つ言葉による傷つきと、どうしても思いを姑に伝えられない自分のふがいなさやみじめさが語りの中心であった。この状態を脱するために、A子は離婚や地域を離れて暮らすことも考えた。そうした葛藤の中で、やがて、母親として自分こそが長男を守るのだという自覚が生まれ、姑の言動への批判もなされるようになる。それは、母親としてのA子の存在を蔑ろにしてきた姑がA子に責任を押し付けることへの批判であった。夫に対しても、母である姑から精神的に自立できていないことへの容赦のない批判がなされた。現実の生活の中でも、A子は姑に対して黙ったままではなくなった。自分の思いを伝えるだけでなく、姑の問題点の指摘もなされるようになる。ついに、A子の母親として長男を守るという強い意志は、A子と家族との関係や長男自身を変えていく。母親に守られた長男は、農業の手伝いや地域の中での活動を始めるようになる。そのことで、A子の発言力は増し、家族の中心的存在はA子へと移行していく。長男の不登校をきっかけにA子は一家の中心的存在として、地域の中に根付いて生き抜くたくましい母へと変容していったのである。この段階で、筆者としては、ようやく、これからA子自身が一人の人として人生を如何に生きるかとい

う課題に向き合うところに来たと考えていた。しかし、A子自身はそれ以上の内的作業の継続を望まなかった。

A子は、この時、周囲の人たちから押し付けられたのではなく、自らの意志として地域に生きることを決意していた。それは、地域の外にいるカウンセラーとともに地域の外にあって個としての在り方を追い求めることではなく、自身の中に培われてきた風土性に生きる選択であった。つまり、地域の内にあって地域につながる人々とともに、風土に抱かれながら生きることへの決断であった。A子がそこに至るまでの心理的援助としてカウンセラーは必要であった。しかしながら、個の確立のために心理的援助を受け続けることは、A子の内なる風土性に葛藤をもたらし、地域風土に対する違和感を抱かせる可能性があった。そのことで、A子は地域という枠の中では生きていけなくなることも考えられた。地域で生きることを決断したA子にとっては、これ以上の心理的援助は、その時点においては、もはや必要とはしなかったのであろう。

一方長男は、近代科学の成果を学ぶ場である中学校には二度と通うことなく卒業を迎えた。卒業直前から母であるA子とともに自宅周辺の散歩をしたり、畑で作物を育てるようになっていた。卒業後の春には父をはじめとする地域の男性とともに田植えに取り組んだ。学校には通えなかった長男は、田や畑等の土や自然とともにあることで再び生きることに向きになった。地域の自然や地域の人々との関わり、つまり地域風土に包まれて歩み始めた長男にとって、地域の風土は生きる場として切り離すことが出来ない存在となったのである。

心理面接を通じて、姑の意向に逆えず自らの意志を表明できない嫁から地域に根付きながら子どもを守り育てる母親へと変容したA子は、今後は、一人の母としてまた一人の地域に生きるものとして地域の風土性を伝承する存在となり、地域に生き続けるであろう。そうである限り、A子は風土と一体化し、母の懷に抱かれるように風土に包まれて心安らかに生きていくのだと思われる。A子にとってもまた、風土は生きることそのものと結び付く存在となったと考えられる。

V. おわりに

事例地域は、近代以前の日本を残す特殊な地域のように思われる。敢えてこの地域での事例を紹介したのは、「本質的には母性社会として存在し続ける日本社会」(河合、1975)そのものの典型ともいべき地域社会であり、日本の伝統的風土性を残す地域だと思われるからである。しかし、日本社会全般において失われたように思われる伝統的風土性は、表面的に西欧近代化に覆われることによって、消滅してしまったように見えるにすぎないとも考えられる。実際には、今もなお、事例地域のように包み込み変化しないことと守りの風土性は、日本社会の根底にあるその核となるものの一つとして存在し続けていると思われる。この風土性は母性そのものであり、それが日本の母性社会を存続させ続けていると思われる。

われわれは日常生活の中で、自身が生きる場の風土を特に意識することは少ない。ところが、そこに違和感を覚えた時に、自分に馴染みのない風土として意識することがある。風土はある地域の景観や慣習、文化として表現されるが、意識化される風土とは、これまで自己が生きてきた風土と異なる風土であり、個人の内的世界に存在する風土性に働きかけ、揺さぶりをかけてくる

と思われる。また、一方、個人が生まれ育った地域ではなくともその風土を特に意識しない時、そこに住まう人々の風土性と差異のない風土性が個人の内に存在すると思われる。

このように考えるならば、近い将来、事例の長男が母から分離独立した成人となろうとする時に母子ともに心理的援助が必要になってくることも考えられるが、この面接を終了したその時点では、事例女性A子が心理面接を継続させることで、A子自身の現在の在り様や個人として如何に生きるかを明確化していくことは自己の存在する風土への違和感を生じさせることとなり、そのことによって地域や家族との決別を招いた可能性もある。事例女性は無意識の中でそれを感じ、面接を終わらせたとも考えられる。女性は家を捨てる可能性よりも、地域の中で一人の母として生きることを選択したのである。筆者はそれに思い至った時、日本という風土の中での心理療法について改めて考えることになった。近代的自我の確立を目指す西欧的心理療法を、日本において、そのままの形で実践していけるのかという疑問が生じてきたのである。これまで先人が見出してきた偉大なる知見を基盤として、日本の風土に配慮した心理療法が求められていく必要性を感じたのである。今回生じた疑問への回答を求めるべく、更に日本の風土及び風土性への検討を加えていくと同時に、日々の心理臨床実践に真摯に取り組みながら日本の風土と心理療法について考え続けることで、日本の風土に配慮した心理療法とは如何なるものかを明らかにしていくことを今後の課題としていきたい。

《引用文献》

- 青木真理・山本昌輝・山本陽子・橋本朋広・青柳寛之・加藤清（2006） 風土臨床：沖縄とのか
かわりから見えてきたもの コスモス・ライブラリー
- Aristotle (BC. 4c) 政治学 （牛田徳子訳 2001 『西洋古典叢書』京都大学学術出版会）
- Berque,A (1986) *Le Sauvage et L'artifice – Les Japonais Devant La Nature*.Editions
Gallimard. (篠原勝英訳 1992 風土の日本 筑摩書房)
- Blache,P (1922) *Principes de Geographie Humaine*. (飯塚浩二訳 1940 人文地理学原理
岩波書店)
- Eliade, M. (1958) *Birth and Rebirth*. (堀一郎訳 1971 生と再生 東京大学出版会)
- 古川久雄 (1997) 旅立ちを前に (京都大学アジア研究センター編 事典東南アジア) 弘文堂
- 橋本朋広 (2001) コスモロジー的変容の基本要因—ある神人のイニシエーション過程 心理臨床
学研究、19(3), 231-242
- 橋本朋広 (2005) 祭りにおける風土の創造 京都ノートルダム女子大学研究紀要、35, 165-175
- Hellpack,W (1914) *Die Geopsychischen Erscheinungen : Wetter, Klima und Landschaft in
Ihrem Einfluss auf das Seelenleben* (大日本文明協会編 風土心理學 1915 大日本文明協会)
- Herder,J,G (1791) 歴史哲学 (田中一郎、河合貞一訳 1948 丁子屋書店)
- Herodotus (BC. 5c) 歴史 (青木巖訳 1968 新潮社)
- Huntington, E (1915) *Civilization and Climate*. (間崎万里訳 気候と文明 1938 岩波書店)
- 井上明美 (2006) 地域環境に配慮したスクールカウンセラーの活動について 心理臨床学研究、
24(1), 53-64

- 井上明美 (2009) 近江湖北の神事をめぐる心理臨床学的研究 京都大学大学院教育学研究科紀要、55, 267-279
- 伊藤亜矢子・松井仁 (1998) 学級風土研究の意義 コミュニティ心理学研究、2, 56-66
- 伊藤亜矢子 (2001) 学校風土とスクールカウンセリング 臨床心理学、1(2), 153-158
- 伊藤亜矢子 (2007) いじめの予防：いじめを生む学級風土とピア・サポート 臨床心理学、7(4), 483-487
- Jung,C,G (1930) Der archaische Mensch. (高橋義孝他訳 古代的人間『現代人のたましい』 1970 日本教文社)
- Jung,C,G (1952) Symbole der Wandlung. (野村美紀子訳 1985 変容の象徴 筑摩書房)
- 皆藤章 (1998) 生きる心理療法と教育ー臨床教育学の視座から 誠信書房
- 河合隼雄 (1975) 母性社会 “日本の永遠の少年” たち (『河合隼雄著作集 10 日本社会とジェンダー』) 岩波書店
- 河合隼雄 (1995) 臨床教育学入門 岩波書店
- 九学会連合日本の風土調査委員会編 (1985) 日本の風土 弘文堂
- 旧約聖書 創世記 (関根正夫訳 1956 岩波書店)
- 村武精一 (1994) 宇宙論 (石川栄吉他編 『文化人類学事典』) 弘文堂
- 村山正治 (1999) 学校における心理臨床活動の準備 (小川捷之・村山正治編 学校の心理臨床) 金子書房
- 中村雄二郎 (1992) 臨床の知とは何か 岩波書店
- 西田純子・田嶋誠一 (2000) 中学校の「学級風土」に関する基礎的研究：「教師項目」を含む尺度作成の試み 九州大学心理学研究 1, 183-194
- 尾崎雄二郎ら編 (1992) 大字源 角川書店
- Passmore,J (1974) Man's Responsibility for Nature. (間瀬啓允訳 自然に対する人間の責任 1979 岩波書店)
- Polanyi,M (1962) Personal Knowledge : Towards a Post-Critical Philosophy. (長尾史郎訳 個人的知識 1985 ハーベスト社)
- Ratzel,F (1882) Anthropo-geographie. (由比濱省吾訳 人類地理学 2006 古今書院)
- 篠原徹 (2000) 風土 (福田アジオら編 日本民俗大辞典) 吉川弘文館
- 千葉徳爾 (1983) 風土と住民生活 (千葉徳爾著作選集 2 『民俗学と風土論』) 東京堂出版
- 千葉徳爾 (1980) 日本民俗の風土論的考察 (千葉徳爾著作選集 2 『民俗学と風土論』) 東京堂出版
- 千葉徳爾 (1966) 民俗と地域形成 風間書房
- 鵜飼美昭・鵜飼啓子 (1997) 学校と臨床心理士ーこころ育ての教育を支えるーミネルヴァ書房
- 和辻哲郎 (1935) 風土ー人間学的考察 岩波書店
- White,L (1968) Machina ex Deo : Essays in Dynamism of Western Culture, The MIT Press, Cambridge, Mass. (青木靖三訳 1972 機械と神 みすず書房)

Clinical Psychological Study on Climate: Climate as a Living Environment

INOUE Akemi

In this paper, the climate, which has been disregarded by modern science, is discussed from a standpoint of clinical psychology, which has been deeply involved in the actual existence of humans. Since the modern era, humans have tended to actively objectivize things and nature, and to clarify and control the universal rules of things and nature by obtaining an analytical and mechanistic understanding through science. In Western countries, climate is no exception, and climatology has been developed to “find regularity consistent with human sensitivity and rational nature, and make nature contribute to human sensitivity and rational nature based on this regularity.” In Japan, however, it has been considered since ancient times that the climate directs our lives, and humans can live best by harmonizing it. Although today’s Japanese society has been rapidly changing, no large changes have been made in the climate, which continues to underlay Japanese society, and people’s unconscious life style determined by the climate. This may produce a gap between unconscious and conscious lifestyles, which can result in a variety of problems. Therefore we considered that clinical psychology with close consideration of the Japanese climate would be required with continuous discussion on Japan’s climate.